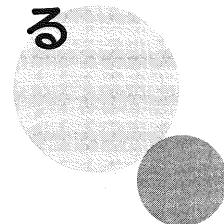


# 大学生を「保育」する



豊田一秀

一般的にいって、幼稚園、保育所は教育の入口であり、大学は出口です。私は幼稚園の世界で二十年以上働いた後、縁あって大学の教員となりました。

このように、教育の両端に位置する機関に夫々職を得たことで、教育の本質について深く考える機会を与えたことを私は幸いに思います。

近年、大学の教育改革に関する論争の中で、講師

ひるがえつてみると、幼児教育では教育における

相互の応答性について常に考えてきたように思いました。保育者が、その一方的な保育目標・価値基準に合わせて幼児を保育しようとしても、幼児にとつて、それは「迷惑な」ことであり、喜びの伴わない、形のみの教育となってしまう危険性があるという事実は保育者が経験から実感としてもつものでしょう。まっすぐに生きる幼い人々から保育者は多くを教わってきたのです。

幼児教育における保育の過程とは、幼児が安心して自分らしさを出し、その幼児のもつ最善の可能性が發揮される過程であると、私は考えます。保育者は幼児を肯定的に理解しようと日々努めつつ、保育的な関係を深めていきます。その結果、幼児は自分の存在をより肯定的に捉えるようになり、「自分が世界を変え得る」という自己の存在の確かさを得ていくのです。換言すれば、自分と世界に対するコントロール感を得るといつても良いでしょう。幼児が、砂場で夢中になつて砂山をつくっているのは、

単に高い山をつくる練習をしているわけではなく、自分が世界を変え得るという体験をしているのだと捉えるのは大袈裟に過ぎるでしょうか……。

大学教育は専門教育であり、前述したような幼児教育と同列に語るのが適当でないことは承知しています。しかし、たとえ専門教育であつても、「今、学んでいる、その勉強を通して何を学ぶのか」という視点はやはり存在すると考えます。そして、「その勉強を通して……」の先にあるものは、幼児教育と同じように、自己表現を通して自分の存在が世界を変え得るという確かさの体得であるとはいえないでしょう。人は本質的に応答性を求め、自己を表現せざにはいられない存在だと私は考えるのです。

学生が求める講義は、自分がそこにいてもいなくとも、何もその場（世界）が変わらないような講義ではありません。学生は講義の中で自己の存在感を確かめたいのではないでしょう。学生が、自分が知りたいことに応える講義、自分の関心を育てる講

義を求めるのはこのような理由によると考えます。

学生にとって面白い講義とは、充実感とともに自分の存在を実感できる講義でしょう。脇道にそれますが、自分がその場に存在していることを実感できる講義という脈絡で考えるなら、「寝ていると注意を受ける講義」も、学生が心のどこかで望む講義の範疇に入るかもしれません。

### コメントカードの活用

双方向性をもつた講義の意味と価値について、児童教育との比較の中で述べてきました。「自分が世界を変える」という実感をもつことが、教育の一つの大目標であると私は考えているのですが、大学の講義の中で、このことに応えうる講義方法はさまざまに考えられるでしょう。たとえば、個別学習、グループ学習、発表形式の講義……などが挙げられるでしょうが、本稿においては可能性の一つとして、私が実践しているコメントカードの利用によ

る応答的な講義の構築について説明します。

最初に、なぜコメントカードを利用するのか、この試みの理由について述べます。第一に、これは日本的学生気質によるものと思われますが、講義中の質問が極端に少ないことが挙げられます。講義中に学生からの反応を得ることが、日本の大学では難しいのです。第二に、日本の高等教育におけるひとクラスの人数の多さです。幸いなことに私が勤務する大学では、百人を超えるクラスはめったにないのでですが、それでも欧米の大学に比べれば人数の多さは否めません。第三に、書くという行為が自分を表現するのに適しているといえるでしょう。学生は書くことによって自分の考え方や気持ちを整理しやすくなるのです。第四に、この方法が実行に移しやすいことが挙げられます。準備としては、用紙さえ用意すれば良いのです。

私の手元には、現在、約一万五千枚のコメントカードが残っています。私はこれまで延べにして、

百分の講義を約三百回以上に亘つて行つてきましたが、これまでのほぼ総ての講義の中で、受講した学生にコメントカードを書いてもらつてきました。このコメントカードを通して、私は彼らの気持ちや要求、そして向上心について多くの学びを得ました。初めに、このコメントカードの内容、使い方について簡単に説明します。

- 1 B6の厚手のルーズリーフを用意し、講義の最後の二十分間に学生に配布し、記述を求める（講義の開始時にカードを渡さない方が講義に対する参加度が増すように感じる）。
- 2 このコメントカードは、毎回の講義時に配布する「講義要旨」とセットになつており、コメントカードに記述してほしい項目については、その都度、講義要旨に示すようにしている。記述する項目は講義の内容、時期によりさまざまである。
- 3 講義要旨は、講義場面によつて異なるが、基本

的には、①前回の復習 ②本日の講義内容 ③配布資料の紹介 ④本日のコメントカードに記述してほしいこと、から成つてゐる。

4 学生に望む主な記述の内容は、①講義に参加しての感想、疑問、質問、反論 ②講義資料を読んでの感想などである。それにプラスして、第一回目は、自己紹介、最終回には講義全体の感想や今後のための提案などを書いてもらうことが多い。

5 講義が軌道に乗つた後には、「友達のコメントを聞いて……」という項目も足される。

6 コメントカードは基本的には記名を求め、次回



の講義時にコメントカードをクラスで紹介する時には記述した学生の名前も紹介することを、第一回目の講義時に伝える。名前を出されたくない場合には、その箇所に「匿名希望」と記せば名前は紹介しないことも付言する。

コメントカードに記名させること、また、クラスにコメントの内容を紹介する時に名前も伝えるということについては、さまざまな意見があることは承知しています。私が、あえて記名形式にする理由は以下の通りです。第一に、特定された個人との双方向の講義を行い、受講者自身に「講義に参加している」という意識をもつてもらいたいため（講義はある意味で観劇にたとえられます）が、私は受講者を「観る人」に留めておくのではなく、受講者にも舞台に上がってきてほしいのです。第二に、自分の書いたものに責任をもつてもらいたいと考えるため。第三に、受講者同士の関係を深めるためです。

7 次回、講義の最初の部分を使って前回のコメントカードを何枚か紹介する。この紹介が前回の復習を兼ねる。以降、この流れが繰り返される。

さまざまなバリエーションがあるものの、カードを使い学生に記述させる講義は、高等教育においても珍しいことではありません。（註1）しかし、学生の発言からは、カードの使用は講師の都合で行っているだけであって、コメントをしてもそれが講義に還元されるという実感が乏しく、本気で書く気になれない、という意見を聞くことが多いのです。

そこで、私は前述のような手順を取りつつ、以下の点に強く留意しました。第一に、書かれたコメントを必ず読むこと。学生にその事実を確信させること。第一に、どのようなコメントであれ、第一義にはそれを認め、記述に感謝し、それを伝えること。第三に、反論や批判を受け入れること。第四に、内容が稚拙であって論理的でない場合でも、内容を肯

定的に理解しようとすること。第五に、コメントをクラスで紹介する時ですが、①表現したこと自体を評価する ②内容そのものだけでなく、本音が書かれたことを評価する ③決して全面否定をしない。

こうしてコメントカードの紹介を続いている内に、学生の間に様々な変化が生じてきます。それは、要約すれば、思考し、表現することの面白さへの気づきであり、自分の感受性が鋭くなつていく驚きであり、そして、自分の存在が認められることに対する喜びです。

コメントカードを使っての講義は、大方において次のような過程を経過します。①躊躇、様子を見る、当たり障りのないコメント ②恐る恐るの主張 ③批判的意見の出現 ④友達の意見に対する意見の出現 ⑤コメントされた学生からの返信 ⑥より自由な自己の感情表出 ⑦学友への共感 ⑧クラス全体に対する意見の出現 ⑨より自由な自分の意見の

表出と講義全体に対する積極的な関与 ⑩自分が受け入れられたと感じられたことによる全体に対する感謝。

これまで、学生の変容ばかり述べてきましたが、講義の進行とともに私自身も変容している点に言及しておく必要があります。呼応的な関係の育ちを通して、私も学生一人ひとりに対する理解を深め、より波長の合った接し方ができるようになってくるのです。人間関係は一方通行で終わるものではありません。

当然のことながら、一方で、講義を受けた学生が同じように変化を見せるわけではありません。大きな変化を見せる学生もいれば、そうでない学生もあります。しかし、私はそれで良いと考えています。それは学生に任されている事柄であるし、また、外見上は小さな変化であつても、その学生にとつて、後に外界の見え方の変化につながる可能性を秘めたものであると私は考えるからです。

最後に、最終講義の時に書かれたコメントカードを一例として紹介し、私の小論を閉じたいと思います。

「私は、この講義が自分にとって大きな価値があると思っています。授業展開の工夫がその最大の理由だと思います。特に毎回書くコメントカードは、書くことで自分の考えが呼び起され、また、友人のコメントを聞くことで新たな発見ができます。（中略）コメントカードは先生とのつながりのカードでもあります。口ではなかなか言えないことも、カードでは素直に話すことができます。（中略）私たちは大学生でありながら、この授業の中では先生と子どもという立場にいて、実際に私たちが幼稚園の子どものように、知らず知らずの内に戻っていた部分も少なくないと思います。（中略）これからもつともつと自分を磨いて、いつか先生に、自分のクラスの子どもたちのことを自慢できたら、と思っています」。

教育界の先達、小原國芳は教育を一本の木に喻え、幼児教育を「根っこ」の教育、小学校教育を「幹の教育」と、木の上部に上がっていく、大学教育は「葉っぱの教育」に過ぎないと喝破しました。

「幹の教育」と、木の上部に上がっていく、大学教育を、眼には見えない「根」の部分に喻えたところに私は氏の慧眼を思います。しかし、視点を変えれば、氏は木が木として成り立つためには「根っこ」も「葉っぱ」も、それぞれに大切な部分であると話されたのだと、今にして理解する私です。

（玉川大学）

注1 学生にコメントを求める講義の方式に対する有効性については、様々な研究がなされている。一例としては、宇田光氏の『大学講義の改革』（北大路書房二〇〇五）に、氏の考案されたBRD（Brief Report of the Day）方式について詳しく述べられており、内容は示唆に富んでいる。